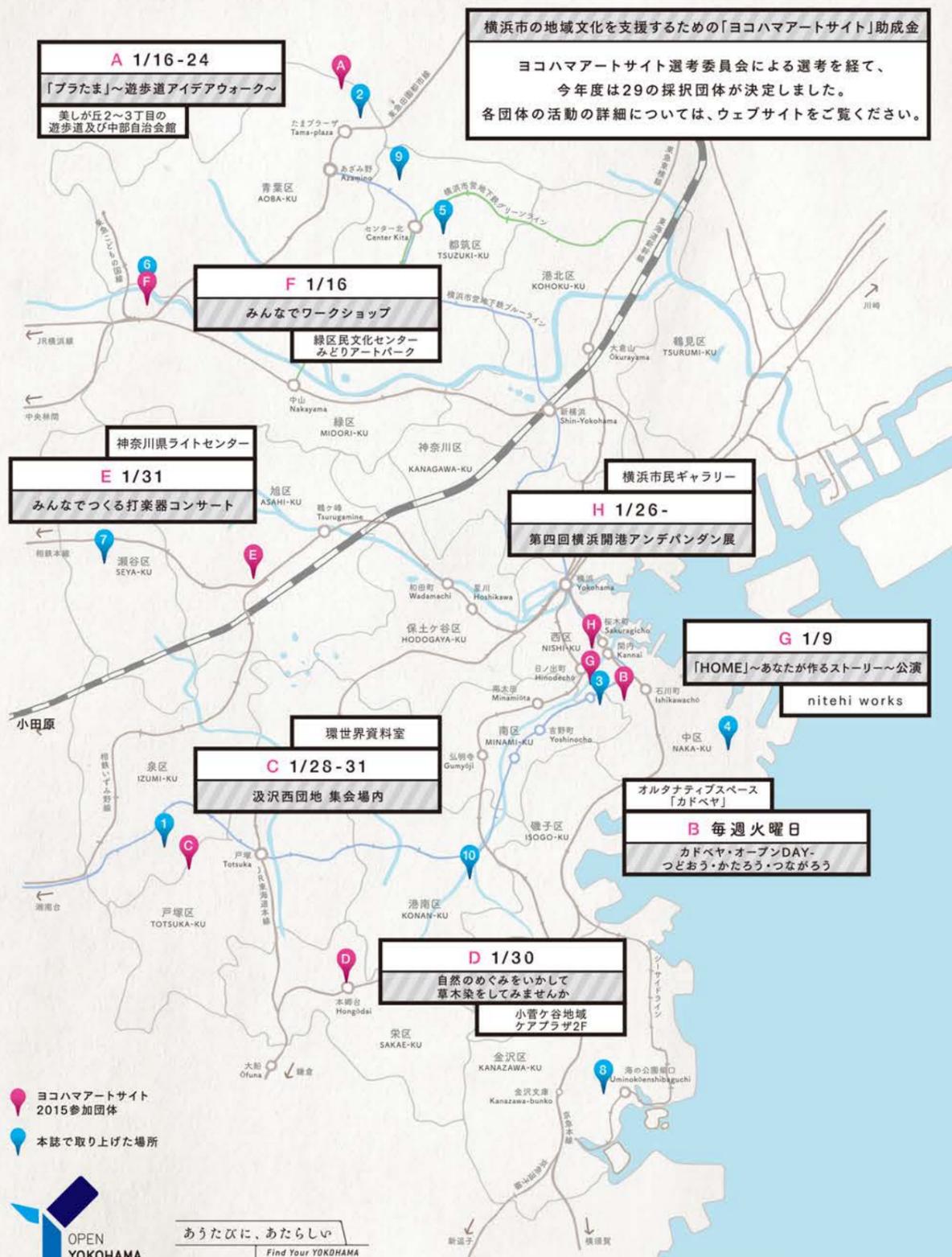


# YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト おでかけMAP

横浜市の地域文化をサポートするヨコハマアートサイト2015参加団体による  
2016年1月のイベントをピックアップ。ぜひ、おでかけの予定に加えてほしいものばかりです。



# ヨコハマアートサイト

横浜の地域文化を考える・応援する



青葉区・美しが丘住宅街



知ってるようで  
知らない  
このまち



土地を歩いて  
見えてくること

大勢が雨宿りしているバス停の建屋でしゃがみこみ、目を凝らしているのは、生き物の生態に詳しい泉健司さん。「尺取虫がいますね。こっちはジョロウグモ。このヘクソカズラは風邪薬にもなるといわれる植物です」。アーティストの岩田とも子さんとともに、土地を歩くツアーが始まった。

戸塚駅からバスで15分ほど進むと、土地が大きく円形状に開ける。『環世界』と名付けられたこのアートプロジェクトの舞台は、米軍の旧

深谷通信所周辺。2014年に日本に返還され、現在は「跡地利用の方針を検討中」の段階だ。

広大な敷地では、スズメが熟れたキンエノコロの実をついばんでいる。カミキリムシが穴を開けたクヌギに、カブトムシが集まってくる。帰化植物が広がり人の手が増えられた自然だが、小さな生態系の環が息づいている。

ドライバーにとっては、県道402号線が突っ切る場所であり、近隣住民が夏祭りの盆踊り会場や家庭菜園、少年野球チームのグラウンドとして使っていた場所でもある。一方、通信施設が使われ



ていたころの米軍は、厚木や横須賀の基地との関係で土地を把握していた。このツアーを企画したサイト・イン・レジデンス実行委員会の坂田太郎さんは「多くの視点が織り込まれた場所」と話す。「何度も同じものを見る、じっくり見る、違うものと結び付けて見る、見ながら違うことを考える、といったように、アーティストたちの視点は多様です。世界も、彼らの視点を借りることで、違った面が見えてきます」

ふだん通りすぎるだけの場所を、アートの視点で捉えなおす試みが市内各地で進んでいる。

2

## 住宅街での美術展 作品をめぐる まちなみを感じる

青葉区・美しが丘で活動するAOBA+ART。彼らは08年より住宅地を舞台にした美術展と、作品をめぐるアートツアーを開催している。名前の通りまちとアートが出会うことを重視し、それによりまちの営みに触れるきっかけを生み出そうと試みている。1963年に開発が始まったこのまちは、遊歩道が多く、季節の色に染まる街路樹が人びとの目を楽ませる。



展覧会のために美しが丘を訪れたアーティストは、まずまちを歩くところからスタートする。自分に見えたまちの姿を作品で表現し、住民を含む観客は作品をきっかけにして新たな視点でまちを見つめる。「風景になじむ作品が多いので、作品を楽しむ中で自然とまちなみを見るんですよ。ここは家自体が個性豊かだし、街区ごとの雰囲気もそれぞれ違いますから」と語るのは住民でもあり実行委員の藤井本子さん。アート作品を確認しに行く作業としてではなく、改めてまちを見る機会としてのツアー。今年度の開催は16年1月16日から予定されている。



3

## 歩いて体験 かつての横浜

南区・蒔田公園の入り口で川を眺める一団がいる。先頭でピンクの旗を掲げる女性は、ボランティアのツアーガイドだ。横浜シティガイド協会は92年の発足以来、横浜市内を中心にしたオリジナルコースをガイドし、地域の魅力を発信している。この日のコーステーマは「中村川周辺を歩いて賑わいの酉の市へ」。参加者は10人ずつのグループに分かれ、まちなかを巡る。どのグループもコースは共通だが、帯同するガイドの興味や得意分野によって内容の味つけが異なるため、リピーター参加者も少なくない。そのコースに、どんなストーリーを持たせるか。そこにガイドの個性が出るとガイドの一人である金本邦彦さんは話す。今自分たちが渡っている橋は何年にどんな目的で架けられたのか、といった情報のひとつひとつが、物語の中に配置されることによって、かつての横浜の姿を参加者の中によみがえらせる。また、注目したいのはツアー参加者のほとんどが市民だという点だ。かつて観光と言えば他郷を訪れての物見遊山だけを指していたが、そのかたちも多様化しつつある。



4

## 知ってるはずのまちを 旅人のようにさまよう

演劇クエストは、参加者が「冒険の書」と呼ばれるゲームブックに書かれた指示を手掛かりに、まちを自由に回遊する試みだ。昨年度のヨコハマアートサイト支援事業・本牧アートプロジェクト2014の目玉企画のひとつでもある中区・本牧地域をその舞台とした「本牧ブルース編」では、バス路線が発達した地域ならではの特色を活かし、参加者はバスを乗り継ぎ次の指示へと進む。どの道を進むかは自由。その選択によって、次の指示は変わっていく。

ゴール地点のないこのツアープロジェクトは、まさに旅そのものだ。さらに、旅の中で参加者はまるで萩原朔太郎の小説「猫町」のように、見知った土地で迷子になるよう仕掛けられている。「参加者が道を失うというのは、はじめから構想していました。アイデンティティを失うことで、不安もあるけど、未知のものに対峙するときって感覚が研ぎ澄まされるじゃないですか」と作者の藤原ちからさんは語る。そこには参加者が能動的にまちと出会うための仕掛けがある。

自分の体を使ってその場所へ行き、実際に体験することで、それまで持っていたまちへの認識のフレームが揺らぐ。空間との新たな関係を結ぶ場にアートは生まれている。

表紙	AOBA+ART《日々・猫》 本間純2011(一部)
P.1,2	サイト・イン・レジデンス2015 「環世界」公開プログラム 「土地を歩く9 泉健司×岩田とも子」
P.3左	AOBA+ART《Lat/Long project》 谷山恭子2014(一部)
P.3中上	横浜シティガイド協会 ツアー風景
P.3中下	本牧アートプロジェクト2014 「演劇クエスト・本牧ブルース編」 冒険の書

ヨコハマ  
アートサイト  
ラウンジ  
Vol.7

## 遺跡公園、都筑民家園と コミュニティアート



【会場】都筑民家園(横浜市都筑区大瀬西2番) 【ゲスト】西田由紀子(よこはま市民メセナ協会会長)、高橋満(中川小学校・地域交流支援活動運営委員会委員長)、井上攻(横浜市歴史博物館副館長)、小林道子、鈴木珠実 【主催】ヨコハマアートサイト事務局+NPO法人都筑民家園管理運営委員会

## 地産地消でつなぐ 民家園の コミュニティアート

10月31日、市営地下鉄・センター北駅にほど近い都筑民家園では紅葉が始まり、芸術の秋の深まりが感じられました。

地域文化を考え、交流するための場「アートサイトラウンジ」。今回の会場の主屋には、アーティスト・七谷亜紀彦さんが民家園にある竹と照明を組み合わせた作品が置かれています。竹にちなんで、パフォーマーの小林道子さん、鈴木珠実さんがバリ舞踊を披露。幻想的な空間が広がります。

また、テーブルコーディネートを担当する「おとなのおままごと」のみなさんによる、里芋のパエリアや、いぶりがっこのカナッペなど地場の野菜などを使った料理に、参加者は舌鼓を打ちました。

は、コミュニティ・アート。民家園は、地域の学校や地域の人たちが鑑賞、体験、参加できる垣根の低いアート活動に注力しています。

民家園の活動にも参加し、その展開に大きな関心を寄せている、よこはま市民メセナ協会の西田由紀子さんは「竹林クラブ」などの自立的なボランティアの動きに注目します。

これを受けて、横浜市歴史博物館副館長の井上攻さんは、東京・芝の増上寺領地だった時代から、この地域には竹が広がっていたことに触れ、そこから地域の歴史を解説しました。

6 いまに残る長津田宿から、  
あたらしい文化圏を  
つくりたい

藤井ゆずるさん  
(緑区民文化センターみどりアートパーク)

私が働いている緑区民文化センター・みどりアートパークのある長津田は、住宅地というイメージが強いですが、時おり駅に鉄道ファンが集まっているのを見かけます。東急電鉄の車庫があるからで、隠れた交通の要所です。人々が行き交う場所としての歴史は、江戸時代にまでさかのぼります。東海道の裏道にあたり、大山参詣の信仰の道でもあった大山街道の「長津田宿」として栄えた歴史があるんです。

こういった地域の文化を大切にしている団体のひとつ「ふれあいサロン長津田」のみなさんは、史跡の地図づくりもされています。ホールにも置いてあります。たとえば、宿場の象徴でもある常夜灯は、いまま長津田駅南側の街道脇に立っていて、歴史がいまに残っているのを感じます。

こういった文化を伝えていくのは簡単なこと



ではありません。以前、ある地域で民俗芸能の企画を担当した際、後継者不足問題だけでなく「ムラがなくなったので芸能が途絶えた」という報告を受けたことがありました。お祭りはやるけれど、お囃子の人たちはよそから来てもらって凌いでいる、という例も少なくありません。

そこで14年のホール開館時、緑区にある鴨居郷土芸能保存会、寺山囃子保存会、長津田囃子保存会、西八朔囃子保存会の4団体を招いて「民俗芸能フェスティバル」を開催しました。お囃子の体験コーナーも作るなど工夫を凝らして、現在も続けています。

地域の歴史と文化を探るレクチャーシリーズを企画するほか、タワーマンションに住む方をはじめ新しい住民の皆さんにとって、文化の橋渡し役になれるよう努力しています。

この地域の生活圏を考えると、意外に町田や渋谷といった、横浜以外の場所に対して心理的な距離が近いようです。行政の区域とはまた違う感覚があるんでしょうね。みどりアートパークにお越しになる方は、緑区民にとどまらず、青葉区、都筑区、町田市の方が多いのです。長津田を基点に、新しい文化圏をどう作ったらいいか、これからの挑戦していきます。

\*このコラムでは市内の地域文化について、様々な方にお話を伺っています。

事務局うろうろ日記



ヨコハマアートサイト事務局は、  
今日も、横浜市内の  
あっちこっちへうろうろしています。

7 9月30日(水)

瀬谷駅からバスに揺られ、新そば祭り／そばの花ふれあい祭りへ。秋空の下、蕎麦の白い花が一面に咲き広がる気持ちのいい景色。会場につくと蕎麦を食べるための長蛇の列ができていた。蕎麦のほか、天ぷらや蕎麦団子、ぜんざいなどメニュー豊富。出店の前には白い花をつけた蕎麦の畑が広がっている。お土産に、竹の一輪挿しと蕎麦の花を頂いた。



9 10月31日(土)

都筑区にて「秋の中川ふれあいフェスタ2015」。にぎわう駅前広場には地元のお店が屋台を出している。『こども花人間まちを元気に』プロジェクト・バルーンアートのワークショップブースでは子どもたちの笑顔が輝いている。そんな様子を撮影するため、上空高くにマルチコプターが上がり、あたりは大きな歓声に包まれた。



8 10月10日(土)

金沢文庫芸術祭の街角アートラリープログラムのひとつ「～アイヌの狩人になろう～アイヌの弓矢作りとアイヌ音楽の夕べ」を見に、アサバートスクエアへ。アイヌの装束に身を包んだアーティストたちによる、火を囲んだ儀式からコンサートはスタート。弦楽器・トンコリの音色と時折激しくなる雨音の中、幻想的な時間が流れていった。



10 11月7日(土)

港南区・横浜刑務所。年に一度の「横浜矯正展」へ。受刑者が制作した、繊細で鍛錬された家具や小物が所せましと販売されている。革製品やヒノキの家具といった質のよい品物を安価で手に入れようと、買い物客でにぎわう。ふだん一般の人が立入ることのない敷地内。今日はステージで、ライブの歓声が響いている。



ヨコハマ  
アートサイトとは

ヨコハマアートサイトは、市民やNPO団体等が主体となって地域課題へのさまざまなアプローチを行う文化芸術活動を支援することで、地域におけるつながりやネットワークを広げ、コミュニティの活性化を図る「地域文化サポート事業」です。そのために、一年を通じて、参加者間の研修や交流に取り組んでいます。平成26年度より、STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団で事務局を担当しています。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局  
〒220-0004 横浜市西区北幸  
1-11-15 横浜STビル 208  
(NPO法人STスポット横浜  
地域連携事業部内)  
TEL:045-325-0410  
FAX:045-325-0414  
WEB: <http://y-artsite.org>  
MAIL: [office@y-artsite.org](mailto:office@y-artsite.org)

@Y\_Artsite

ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト Vol.006

発行 ヨコハマアートサイト事務局  
編集 NPO法人STスポット横浜  
テキスト 小川智紀 池田友実  
上田真祐子 梶谷亮太  
デザイン 相澤事務所  
撮影 福井裕子  
印刷・製本 合資会社 三島印刷所  
協力 藤原ちから(BricolaQ)  
横浜シティガイド協会  
※五十音順、敬称略  
発行日 2015年12月28日

季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。